

# 日本IT書紀

179 赤軍

10 迅風篇  
卷之二十五 懊惱

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第七十九

赤軍

一

この節からしばらく、情報産業のことから離れる。時代背景ないし「世相」を概観するように思えるだろうが、一九五〇年代から積み重ねられた戦後社会の宿痾がはじけ、一九八〇年代以後、つまり「われらの時代」の下地を形成した。

と同時に、情報産業の世界から一九七〇年代を眺めると、社会・経済・文化というものがコンピュータやネットワーク、情報システムに急速に接近する時代である。つまり「情報化社会」の幕開けだった。

しかし視点を変えると、本当は全く逆で、情報産業が社会性や経済的なウエイトを高めていった、と見ることもできる。地球に帰還する宇宙船が大気圏に突入するときのような震動がこの時期に始まったといえなくもない。

これまでと違うのは「激しさ」というものである。一九七〇年代前半の激動に対する評価はさておき、その渦動が

収束して以後、この国は変化することを拒否し妥協と同調に迎合する体質に転換したように見える。

一九六九年の時点で、反米・反戦の学生運動は「全学連」の名で総称されていた。街頭でビラを配りデモを繰り返す学生たちは、十把一絡げで「ゼンガクレン」と呼ばれたのだが、厳密にいうとこれは間違いであるらしい。

全学連とは、一九四八年に発足した「全日本学生自治会総連合」である。発足後十年の一九五八年に主流・反主流に分裂し、六〇年安保闘争後、さらに三つに分かれていた。実体がなかったにもかかわらず諸派が「全学連」を名乗ったのは、あたかも本家争いのお題目に似ていた。

三つグループのうち、日本革命的共産主義者同盟革命的マルクス主義（革マル）派と日共系全学連（平民学連）の二派は「旧左翼」と呼ばれた。

第三のグループが「新左翼」である。ただそれも一枚岩ではなく、四つの派に分かれていた。

革マル派、平民学連、新左翼四派は「三派全学連」を結成したが、これもまた羽田闘争を経て六八年夏に分裂し、からくも「全国全共闘連合」としてまとまりを作っていた。

『新左翼理論全史』（新左翼理論全史編集委員会、一九七九、流動出版）巻末掲載の「全学連の系譜」によると、そ

これは次のようなものだった。  
一九六九年当時、まず存在したのは革マル派全学連である。

一方に全国全共闘連合があった。主要な党派は、革共同中核派、社会学同、社会学ML（マルクス・レーニン主義）派、学生解放戦線、日本共産主義学生同盟（共学同）、全国反帝学生評議会連合（反帝学評）、統社同フロント派、プロレタリア学生同盟（プロ学）であって、これをもって「全共闘八派」と称し、全国百七十八大学の全共闘が結集した。社会学同と構改派が細かな党派に分裂し、社会学の流れを汲む一派は「反帝全学連」を結成しつつあった。

一九六九年の九月五日、日比谷野外音楽堂に全国から陸続と二万六千人の学生が集まった。全国全共闘連合の結成大会だった。この大会で全共闘は議長に東大全共闘の山本義隆、副議長に日大全共闘の秋田明大を選出した。

ただし山本は一月の東大安田講堂闘争の首謀者として逮捕され獄中にあつた。このため、副議長の秋田明大が実質的な代表者となった。

大会では中核派、ML派、反帝学評の間で激しい応酬があり、すでにして内部対立のほころびが見え隠れしていた。だが圧倒的多数を占めるノンセクトラジカルの各大学全共闘が、秋田支持を表明したために、全学連各派は大会の進

行を阻止することができなかった。阻止するも何も、全共闘との連携なくして七〇年安保闘争は闘えないのである。

七〇年安保粉碎、沖縄闘争勝利

十一月佐藤訪米阻止

一〇・一〇、一〇・二一闘争勝利

破防法、騒乱罪攻撃粉碎

大学立法発動粉碎、全国大学闘争勝利

ベトナム人民の解放闘争勝利、全アジア人民と連帯して闘おう

反戦派労働者と連帯して闘おう

全国大学をバリケードで占拠せよ

のスローガン八項目が採択された。赤軍派が登場したのはこのときである。

赤軍派の出自は、第二次共産主義者同盟（ブント）にさかのぼる。この組織はインテリゲンチヤの集まりであつて、その分だけ純粹理論主義的傾向が強かった。

ために結成早々に主流派と労働者革命派（「労革派」または「マル戦派」）に分裂し、さらに労革派が「前衛派」「怒涛派」に分裂した。次いで主流派が三派に分かれた。すなわち「情況派」「叛旗派」「赤軍派」である。

二

赤軍派は六九年四月二十八日の沖縄反戦デーを前にブント内に結成された「共産主義突撃隊」に祖形を求めることができる。突撃隊は約五十名で構成され、その前日の四月二十七日、社会学四百、中核百三十、ML三十の計六百人とともに東京医科歯科大学に陣取った。

東京駅から有楽町、銀座一帯で展開する同時多発ゲリラ戦で機動隊を引き寄せ、その隙を突いて霞が関を占拠する計画だった。

二十八日、警備当局は東京医科歯科大学を機動隊約二千で包囲して封じ込めを図ったが、突撃隊が奮戦して機動隊の壁を突破することができた。ところが主力部隊が後続せず、計画が狂った。

突撃隊以下約百人は新橋で他の部隊と合流して虎ノ門、霞が関に進もうと考えた。東京駅周辺に中核派二千、有楽町に全共闘、社会学同赤ヘル反戦グループなど二千、銀座にべ平連三千、浜松町に中央大学全共闘五百が、それぞれに機動隊と激しい攻防戦を展開していた。突撃隊以下百人の別働隊は、こうした部隊を糾合して前進しようとした。

誤算だったのは、「鉄の軍団」を誇った中核派二千が敗

勢になったことだった。中核派は逮捕者を出しつつ有楽町に退き、全共闘、社会学同赤ヘル反戦グループと合流して隊勢を立て直そうとした。ここに銀座方面に展開していたべ平連グループ三千が逃げ込んだため、統制が利かなくなつた。

「新橋へ」

の指示で移動し始めたとき、機動隊が襲いかかった。

デモ隊は総崩れとなり、約六千のヘルメットの集団が新橋に向けて走った。待ち受けていた突撃隊は潰走してくる人数に圧倒され、その流れに呑み込まれてしまった。

——後続部隊を待つことなく、突撃隊がそのまま虎ノ門に進出していけば……。

それは結果論というものだったが、批判とは多くその性格を帯びる。

——焦点は虎ノ門・霞が関に移り、東京、有楽町、銀座の諸部隊は闘いを継続できていたであろう。

執行部への批判が高まった。

次いで六月九日、伊東市で開催された第四回アジア太平洋閣僚会議（ASPA）で、中核派や反帝学評は二千五百人を動員して機動隊七千と対峙し、車内の非常コックを引いて列車を停め、東海道線や伊東線の各駅で機動隊と衝突した。

だが社学同、共産同の二派は

「秋の蜂起のために勢力を温存したい」

として、この闘いに参加しなかった。「秋の蜂起」とは、十一月中旬に予定される首相佐藤栄作の訪米阻止闘争を意味していた。

このとき、共産同の内部で三派の抗争が始まっていた。

より先鋭化して武力闘争に突き進もうとする左派、中核派など多数と連携して戦おうとする右派、中間派が意見を対立させ、右派と中間派は左派を遠ざけるようになっていた。

七月六日、明治大学和泉校舎で右派と中間派が拡大中央委員会を開いていたとき、左派の百五十人がこれを急襲し、議長さらぎ徳三に重傷を負わせ、出動した機動隊がさらぎを保護するという事態が発生した。さらぎはすでに破壊活動防止法違反で指名手配中であつたため、そのまま逮捕となつた。

この結果に対して左派は自己批判を提出して共産同に復帰したが、収まりがつかない右派の一部が左派のリーダー格四人を軟禁し、その中の望月上史が逃亡を図つて重症を追つたことから再び抗争が勃発した。右派と中間派は結束して八月二十二日に総会を開いて左派を除名処分としたために左派は独立に追い込まれた。

一九六九年の八月二十八日、神奈川県三浦半島の城ヶ島に関西弁の学生が三々五々集まつた。気楽な学生たちの合宿か何か、としか見えなかった。

実はこの集会は「共産主義者同盟赤軍派」の結成総会であつて、彼らは月が変わつた九月二日に桃山学院大学で「西日本共青赤軍派総決起集会」、三日に関東学院大学で「結成政治集会」、四日に東京・立石の葛飾公会堂で「赤軍派大政治集会」と立て続けに会合を開き、五日に東京・日比谷野外音楽堂で開かれた「全国全共闘連合結成大会」で、「赤軍派」の名乗りをあげた。

『新左翼運動全史』（蔵田計成、一九七八、流動出版）は記す。

結成間もない赤軍派一〇〇名は、場外でプリント連合派との内ゲバに勝利したあと、手に手に「軍旗」を持つて大会途中から入場した。その瞬間、会場には異様な空気が流れ、やがて拍手がわき起こつた。赤軍派の合言葉は「蜂起貫徹、戦争勝利」であり、政治的立場は「八派解体」であつた。

治安当局は、七月六日に発生した共産同三派の内ゲバ事件で、なにがしかの変化が起こりつつあることを察知していたが、「赤軍派」の結成はこのときまで知らなかった。

同じ九月に赤軍派が発表した文書「全同志への赤軍派からのアピール」を入手した当局は、相当の危険分子であると理解した。そこには次のようにあった。

我々赤軍派は、大胆に次のことを告げなければならない。

一〇・八の時代が終り、世界階級闘争の大転換が迫っている。自衛武装から攻撃的武装へとその質的飛躍をなすべき主体の質が問われている。全学連・反戦・全共闘部隊を、世界革命戦争を切り拓く部隊へと再編し、統合し、世界党——世界赤軍——世界革命戦線として自己を階級闘争に位置付け直すことよってしか敵権力の攻撃に対置しえない。前段階蜂起を実現し世界革命戦争を準備せよ！

文中「自衛武装から攻撃的武装へ」「世界革命戦争」といった言葉は、それまでの反戦・反帝活動組織のチラシやピラに全くない過激さを持っていた。同時に配布した文書「世界戦争」には次のようにあった。

君達にブラック・パンサーの同志を殺害し、ゲッターを戦車で踏みつぶす権利があるなら、我々にも、ニクソン、佐藤、キーシンガー、ドゴールを殺し、ペンタゴン、防衛庁、警視庁、君達の家々を爆弾で爆破する権利がある。君

達に、沖繩の同志を銃剣で突き刺す権利があるなら、我々にも君達を銃剣で突き刺す権利がある。

アメリカの黒人武装過激派組織ブラック・パンサーを「同志」と呼び、「爆弾」という言葉が使われていることに当局は注目した。一月の東大安田講堂事件からこのかた、警察力は格段に強化され、一方の反戦・反帝活動家たちは自由な行動を封じ込められていた。

全共闘八派は、抗議デモの参加者が減少する中で、機動隊と衝突するたびに大量の逮捕者を出した。中でも四月二十八日の沖繩反戦デー闘争で、諸派の中堅幹部がねらい撃ちに逮捕され、さらに中核派と共産同の幹部五人が破壊活動防止法違反で指名手配されたために、指導力が急速に弱まった。

このような状況の中で当局が最も恐れたのは、「窮鼠、猫をかむ」の喩えだった。「赤軍派」がいう「武装」とは、従来の角材や石、火炎ビンといったものを指していなかった。

当局はかなり早い段階で「赤軍派」の中心的な人物に目星をつけていた。共産同急進左派の塩見孝也（京大）、物江克男（滋賀大）、田宮高磨（大阪市大）、小宮隆裕（東大）、奥平剛志（同志社大）、森恒夫（大阪市大）、大西一

夫（同志社大）、植垣康博（弘前大）といった名前が浮上した。

また九月四日に行われた「赤軍派大政治集会」に、約三百人が参加していたことも突き止めた。シンパも含んでの数字であろうが、無視できない規模だった。

特徴的なのは関西の大学が拠点になっていることだった。関東の勢力は六九年春までの闘争で主要な大学がほとんど骨抜きにされていて、代わって関西勢が主導権を握りつつあることを当局は察知した。

このため当局は九月十三日から、桃山学院大、同志社大、大阪市大、京大および、京阪神地域における過激派拠点に強制捜索を実施し、その動きを牽制した。

### 三

この年最大の焦点は、十一月中旬に予定されていた首相・佐藤栄作の訪米だった。日本製繊維製品の対米輸出規制を受諾する代わりにコンピュータの輸入・資本の自由化を延期する、日本政府がベトナム戦争に間接的に協力する代わりに沖縄を返還する。アメリカ政府が突きつけた、餉と鞭<sup>クツ</sup>に対する最終回答をしに行くのである。

反戦・反帝運動各派にとって、国内の繊維会社が窮地に

陥ることは些細な問題だった。ましてコンピュータの輸入・資本自由化は眼中になかった。彼らは反戦・反帝のもとで「佐藤訪米阻止」を掲げて計画を練り、対して治安当局はその前に彼らの動きを封じ込めるかに全力をあげた。十月二十一日の国際反戦デーが前哨戦となった。

『新左翼運動全史』によると、「最大の激戦地」は山手線の高田馬場駅から新宿駅にかけての一带だった。中核派八百人が高田馬場駅でバリケード、火炎ビン、角材を使って機動隊と衝突する一方、別の部隊が複数の交番を放火・炎上させ、青梅街道大ガード付近でML派三百人と合流して、深夜十一時過ぎまで火炎ビン、投石を繰り返した。

社会学同、全共闘武装行動隊、反戦武装行動隊の三百人は両国から神田にかけて複数の交番を襲った。反帝学評、旧構改諸派は築地から東京駅に展開した。東京駅の八重洲口中央広場が火災ビンによって炎上し、銀座四丁目交番と日本橋中央署が襲撃され、築地魚市場正門に火炎ビンが投げられた。

革マル派百人は、新宿戸塚二丁目交番を火炎ビンで炎上させ、西大久保職安通りで機動隊と衝突した。大学ベ平連の約二千人は飯田橋駅ガード付近にバリケードを築き、機動隊は催涙ガス弾で対抗した。

以上の記録に登場するデモ隊の人数は計五千人前後だが、

当日の逮捕者が一千二百二十二人と過去最高に達したことからすると、『新左翼運動全史』が記すのはごく一部の目立った動きということになる。

このとき、過激派の動きに大きな変化が生まれていた。数人編成の特命部隊が特定機関を狙い撃ちするゲリラ戦法が、組織的・計画的に行われたのだ。

『新左翼運動全史』は次のように記す。

首相官邸、自民党本部、福岡県庁、日経連、生産性本部、NHKへの突入、占拠、火災ビン襲撃が反帝学評によって敢行され、ML派は東京拘置所、自衛隊市ヶ谷に突入、その他、赤軍派三名は第八、第九機動隊本部にたいして手製爆弾を投げた。

さらに、京浜安保共闘（日共革命左派神奈川県常任委Ⅱ日共山口左派から分裂した中国派系）は、米軍横田基地にたいして火災ビン攻撃を行い、米軍機を炎上させた。だが、この闘いは報道管制によって、握りつぶされた。

「手製爆弾」「京浜安保共闘」という言葉が登場した。

さらにその戦法がゲリラ化し、攻撃の対象が治安当局や行政府ばかりでなく、日経連やNHK、さらに在日米軍基地にまで広がった。

のちに明らかになったことだが、赤軍派は十月二十一日の国際反戦デーで鉄パイプ爆弾を使用することを計画していた。彼らは六十本の鉄パイプ爆弾を製造し、東京薬科大学構内に運び込んでいたが、事前に警視庁が押収した。このため実際には、両切りタバコ「ピース」の缶を使った小型爆弾が使用され、中野坂上でのパトカー襲撃が行われたにとどまった。

治安当局は赤軍派が九月に発行した文書「全同志への赤軍派からのアピール」「世界戦争」に記載された過激な内容に敏感に反応し、具体的な行動計画を探ろうと務めていた。その結果、彼らが東京・永田町の首相官邸を襲撃し、佐藤栄作首相を「逮捕」する目論見であることを察知した。佐藤首相の訪米は十一月十七日に予定されていたが、間際は警備が厳重にも厳重さを増す。首相官邸襲撃があるとすれば十一月初旬であろう、と当局は推測した。

この推測は当たっていた。彼らは一〇・二一の反省から、鉄パイプ爆弾の製造・保管基地を地方に移し、十一月十日前後を期して行動に出るべく、猟銃、斧、ナイフなどを集めていた。

十一月三日の文化の日、千葉県警から警視庁に緊急連絡が入った。かねて張り込んでいた赤軍派学生が動いた、というのである。



その学生はナップザックを背負ったハイキング姿で、総武線から中央線を乗り継ぎ、山梨県に向かっていた。むろん、これだけでは警察当局は動きようがない。休日を利用してハイキングに行くだけの人を不審尋問する根拠がなかった。

やむを得ず張り込みをしていた刑事が尾行し、連絡を受けた警視庁の刑事があとを引き継いだ。その学生は中央線塩山駅で降り、大菩薩峠に向かうバスを待つ人の列に紛れ込んだ。

現在のように携帯電話があれば尾行の状況を逐一報告することができるが、当時は公衆電話が唯一の手段だった。刑事は駅の公衆電話から本庁に連絡を取った。

塩山駅から大菩薩峠に行くには、バスで登山口のある「裂石」という集落まで行かなければならない。古く武州多摩川筋と甲州笛吹川筋をつなぐ青梅街道が、標高一千九百メートルの山頂に細々と続いている。

林道を登っていくと、まず到達するのが上日川峠で、ここに「長兵衛山荘」という山小屋が建っている。さらに登っていくと唐松尾根で道が分かれ、その分岐に「福ちゃん荘」、さらにその先の富士見新道分岐に「富士見山荘」「勝縁荘」があった。

そのうちの「福ちゃん荘」という山小屋に学生は入った。

東京から尾行してきた警視庁の刑事はここでしばらく張り込みを続け、千葉からやってきた学生と同じような年代の若者たちが二人、三人と入っていくのを確認した。総勢三十人以上で、山小屋には「ワンダーフォーゲル部の合宿」と称していることも突き止めた。

刑事は一度山を下り、途中の交番で電話を借りて応援を求めた。そのころには全国の警察から、監視していた赤軍派学生のうち数人がハイキング姿で山梨方面に向かったという情報が入っていた。赤軍派がここで何ごとかを企んでいることが判明した。

警察が福ちゃん荘に踏み込んだのは五日未明である。容疑は「凶器準備集合罪」だった。逮捕者は五十二人に及び、大量の鉄パイプ爆弾、ナイフ、斧などが押収された。赤軍派は首相官邸襲撃のための武闘訓練を行っていたのだった。乱闘の中、一人が逮捕を免れ逃走することに成功した。

彼は大慌てで山を降り、息せき切って都内の喫茶店に電話をかけた。そこは赤軍派の連絡場所で、緊急事態が発生した場合、必ず通報することになっていた。折りしもそこに議長・塩見孝がいた。

「公安当局に簡単に尾行される未熟さを露呈したという恥ずかしさと、赤軍派は口先ではなく本気で武装蜂起をしようとしていることが、これで分かってもらえると思った」

と塩見は後年語っている。  
ともあれ蜂起部隊の一斉逮捕で赤軍派の計画は頓挫せざるを得なかった。

~~~~~ 補 注 ~~~~~

全日本学生自治会総連合 一九四七年連合国軍総司令部(GHQ)が打ち出した国立大学の地方自治体委譲案や大学理事会法案、授業料三倍値上げ案などに反対し、四八年六月授業料値上げ反対と大学理事会法案反対を掲げた教育復興学生決起大会が東京・日比谷公園で開かれた。このとき約五千人の学生が文部省までデモ行進を行った。これがきっかけとなって「全国国公立大学高等自治会連盟」が結成され、全国大学での一斉ストを決議した。同年九月十八日から二十日までの三日間、百四十五校の代表による全国国公立大学高等代表者会議が開かれ、全日本学生自治会総連合が結成された。

「新左翼」四派 ①革命的共産主義者同盟全国委員会⇨革共同中核派(マルクス主義学生同盟中核派) ②社会党社青同解放派(社会主義青年同盟学生班) ⇨社青同 ③社会主義学生同盟⇨社学同 ④統一社会主義同盟フロント派⇨統社同構造改革派

全国全共闘連合 六八年一月中央大学昼間部の学費値上げをめぐる紛争を引き金に、各地で学園紛争が盛んになり、多くの大学でバリケード封鎖やストライキが起こった。日大、東大では全学共闘会議(全共闘)が結成され、党派に属さない「ノンセクトラジカル」と呼ばれる一般学生が多く参加した。

山本義隆 やまもと・よししたか/1941) …大阪に生まれ六四年東京大学理学部を出て同大学大学院に進んだ。湯川秀樹から「千人に一人の逸材」の評を得たが、六八年東大全共闘委員長となり六九年一月の安田講堂事件で逮捕され、のち大学院博士課程

を中退して駿河台予備校の講師となった。

秋田明大 あきた・あけひろ/一九四七) …広島県に生まれ日本大学二年生のとき学内サークル「社会科学研究会」に入った。六八年日大闘争で全学共闘会議議長となり、全共闘の指導者として大きな影響力を持った。当時は名前を「めいだい」と読ませていた。活動の時期は約三年間で、その後闘争時代の回顧を『獄中記』異常の日常化の中で(一九六九、全共社)としてまとめた。ブント Bund: 一八四七年、ロンドンで亡命ドイツ人を中心に結成された「共産主義者同盟」(der Bund der Kommunisten)に由来する。「Bund」は「同盟」の意味。第二次共産主義者同盟の中から森田実、西部邁、加藤紘一などが出た。ただし赤軍の出自がそうだからといって、この三人が非合法過激派であったわけではない。むしろこの組織はインテリゲンチヤの集まりであって、その分だけ純粹理論主義的傾向が強かった。

▼森田 実 もりた・みのる/1932~2023。静岡県伊東市に生まれ東京大学工学部を出て日本評論社に入った。同社出版部長「経済セミナー」編集長を経て七三年独立評論家となった。現在はテレビの報道番組や政治討論会などでコメントイターや司会も務めている。主な著書に『森田実政治評論集』がある。

▼西部 邁 にしべ・すすむ/1939~2018。北海道に生まれ六四年東京大学経済学部を出て横浜国立大学助教授、東大教養学部助教授を経て八六年東大教授。学生時代は東大自治会委員長、全学連執行委員を務め六〇年安保闘争を指揮した。七八年ごろから保守的な傾向を強め八三年に出版した『大衆への反逆』以後、大衆社会時代を批判的に論じた。

▼加藤紘一 かとう・こういち/1939~2016。山形県に

生まれ六三年東京大学を出て外務省に入った。七二年の衆院選で父・精三のあとを継いで山形二区から自民党公認で当選、七八年大平内閣で官房副長官、八四年中曽根内閣で防衛庁長官、九一年宮沢内閣で官房長官、九七年自民党幹事長。宮沢派に属し九八年宏池会会長。二〇〇〇年十一月衆院における森内閣不信任案提出の際、同調する動きを見せたが失敗した。

**霞が関** 地名は「霞が関」、地下鉄の駅名は「霞ヶ関」と表記される。

**ベ平連** 正式名称は「ベトナムに平和をー市民連合」。ベトナム戦争の激化と世界規模の反戦運動の高まりを背景に、一九六五年小田実、開高健、鶴見俊輔、堀田善衛らが始めた市民運動が全国に広まった。平和的デモ・反武力闘争、討論会や反戦広告、米兵の脱走援助などを活動の原則とした。草の根的な運動で地域や母体組織の名を冠したベ平連が発足し、ピーク時には「ベ平連」を名乗る団体が全国に三百以上存在した。小田実らが設立したベ平連は一九七四年に解散した。

**さらざ徳二**「さらざ・とくじ」/1929〜2003。本名は「右田昌人」。「仏徳二」の筆名もある。

**望月上史** もちづき・たかふみ/1947〜1969。同志社大学社会学部の三年生だった。七月七日中央大学一号館三階の法学部長室に軟禁され、二十五日に消防用ホースを伝って逃亡を図った際、転落した。六十六日後の九月二十九日、昏睡状態のまま死亡した。

**ブラック・パンサー** 一九六六年、カリフォルニア州オークランドでビューイ・ニュートン (Huey Percy Newton/1942〜1969) とボビー・シール (Bobby Seale/1939) が結成し

た。初めは都市部の貧しい黒人を白人差別主義者グループから守るのが目的だった。キング牧師の暗殺(一九六八年四月)を機に、共産主義と民族主義を標榜し、武装蜂起による黒人開放運動に転換した。

**キーゼンガー** Kurt Georg Kiesinger/1904〜1988。ドイツ連邦共和国第三代首相(在任一九六六〜一九六九年)を務めた。第二次対戦前、ナチス黨員として外務省ラジオ宣伝部に勤務したことを咎められ十八か月収容所に収監されていた。

**ピースの缶** 「ピース」は一九四六年一月十三日に一箱十本入り七円で発売された。駐留アメリカ軍兵士向けにパイタバコ風の豊かな香りにブレンドされ、「PEACE」の表示が斬新だった。缶入り五十本パッケージが発売されたのは四九年で、オリーブの枝をくわえた鳩のデザインが使われるようになったのは五二年からである。

**凶器準備集合罪** もともとは第二次大戦後に多発した暴力団同士の武装抗争を取り締まる目的で制定された。その場合の「凶器」とは銃刀・爆発物類を指しており、新左翼過激派の反米・反帝闘争には騒乱罪が適用されていた。赤軍派は鉄パイプ爆弾などが「凶器」と判断された。

**塩見孝也** しおみ・たかや/1941〜2017。兵庫県に生まれ六二年京都大学文学部に入り共産同関西派の活動家として頭角を現わし六九年赤軍派議長となった。七〇年三月東京都内で逮捕され八三年懲役十八年の判決を受けた。八九年満期出所し評論活動を行った。主な著書に『封建社会主義と現代』などがある。

# 日本IT書紀 179 赤軍

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会  
<http://www.ossaj.org/>  
[info@ossaj.org](mailto:info@ossaj.org)

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。